

◆書評 1◆

逆井聡人著『〈焼跡〉の戦後空間論』が提起する
「戦後復興・開発」を分析する視座

An Analytical Perspective on “Post-war Reconstruction and
Development” Proposed by Akito Sakasai’s *A Theory on
Burnt-out Ruins of Post-war Japan*

上原 こずえ
UEHARA KOZUE

東京外国語大学世界言語社会教育センター
Tokyo University of Foreign Studies, World Language and Society Education Centre

キーワード

開発 復興 近代化 占領 囲い込み

Keywords

development; reconstruction; modernization; occupation; enclosure

原稿受理日：2019.10.1.

Quadrante, No.22 (2020), pp.71-78.

目次

- はじめに：本書の射程
- 「焼跡」が可能にした戦後開発・戦後復興
- 共同性を排除し、破壊の忘却を促す消費資本主義社会の「ナショナルランドスケープ国民的地景」

1. はじめに：本書の射程

『〈焼跡〉の戦後空間論』は、文学作品や映画といったテキストの批評における焼跡や闇市の表象を検証する力作である。記号としての〈焼跡〉や〈闇市〉が「戦後日本」における人びとの復興の出発点としてのイメージを再生産し続けてきたことの意味を本書は批判的に問い直し、「冷戦期日本」という認識枠組を提起する。評者がとりわけ学んだのは、焼跡が生み出される際の権力作用を感知する方法である。本書は以下の通りに構成されている。

序章 〈焼跡〉・〈闇市〉を問い直す

第1部 焼跡・闇市のイメージ編成

第1章 語られない焼跡——戦後日本映画
批評と焼跡表象

第2章 過去が憑依する場——『二十年後の

東京』と『野良犬』に見る戦災復興

第3章 闇市とレイシズム——闇市の構造と
取り締まりにおける対象変遷

第4章 物語のなかの闇市

第2部 戦後日本から冷戦期日本へ——ナショナル・
ランドスケープ国民的
地形と異郷

第5章 田村泰次郎「肉体の門」論——「新
生」の物語と残余としての身体

第6章 〈焼跡〉が闇市を周縁化する——石
川淳「焼跡のイエス」論

第7章 「居たたまれなさ」を越えて——宮
本百合子「播州平野」をめぐる「戦後」
の陥穽

第8章 「異郷」の空間性——金達寿「八・
一五以後」

第9章 「アジモニドゥルおかみさんたち」のたたかい——
民族教育と濁酒

終章 〈焼跡〉の抱擁から離れて

本書の終章における逆井の言葉——沖縄に
ついて「ほとんど触れることができなかった」
(341頁)——は、第二次世界大戦後の沖縄に
おける経済開発と住民運動を主題として研究し



てきた筆者にとって印象的であった。なぜなら本書で展開されている議論は、米軍占領にはじまる戦後の沖縄の経験を考察するための多くの示唆を含んでいるからだ。同箇所の記述にあるように、1952年にアメリカ軍による占領が終了した日本本土の戦後とは異なる戦後を沖縄はたどり、『戦後日本』という認識から沖縄の問題は長い間排除され、別個の問題として扱われてきた」（341頁）。しかしそれは国土面積の約0.6%の沖縄に、圧倒的な割合の駐留兵士数および米軍基地施設がのしかかっているという事実の裏返しでもあった。

第二次世界大戦後の土地空間が、どのような人びとの、どのような営みのなかで形成され、そして改変の対象として囲い込まれていったのか。開発の対象として囲い込まれていくにあたり、どのような人口が構成するどのような場が設定されたのか。そしてその空間をめぐるどのような言説が形成され、あるいはその空間をめぐる表象が形成されたのか。そのような言説や表象のあり方は、その空間を囲い込み、否定し、改変を促すことをいかに可能にしたのか。そうした言説の形成や表象の変遷を伴いながら、ある空間における人びとの共同の生のあり方がどのように否定され、物理的な排除や取り締まりの力が作用したのか。焼跡と闇市を対象に論ずる本書が提起している「戦後空間」を分析する視座を米軍占領期の沖縄の経験と重ねて理解することが本評論の目的である。

2. 「焼跡」が可能にした戦後開発・戦後復興

はじめに、「焼跡」という言葉について考えたい。逆井は「焼跡のイメージは何を包含していて何を除外していたのか」（19頁）という問いを提起し、「新しい歴史が書き記される空白の1ページとして、焼跡という空間が解釈された」、そして『焼跡からの出発』という際、その説話的な力点は『からの出発』に置かれ、

『焼跡』という言葉のシニフィエは常に空白として、戦後日本の『グラウンド・ゼロ』に定められてきた」（21頁）と主張する。

この焼け跡／空白／グラウンド・ゼロのイメージは、焼け跡を引き起こした帝国主義諸国間の争いや資本主義的発達の複雑な歴史的過程とそこに介在するさまざまな主体や権力の存在を抹消する効果を持つ。それは逆井が第2章で言説分析の対象としている東京都の都市計画課が企画し1947年に制作したPR映画『二十年後の東京』ナレーションに重ねて見ることができる。

イギリスの衛生大臣がこう嘆いたそうです。「都市は紙で出来ていればよかった。そうすればその都市が時代に合わなくなれば、すぐ焼いて建て直すことができる。石や鉄でできている都市ほど厄介なものはない。イギリスの衛生大臣がうらやましがりそうなチャンスが我が国を訪れています。……」（80頁）

……私たちの目の前にはいろいろな困難と同時に古い一切が灰になったという好条件が与えられています。そして私たちがこの好機会をどんなに利用するかを世界の国々と物言わぬ子孫の期待とが見守っています。（88頁）

これらの語りについて著者は、「焼失した都市を「古い」ものとして現在と断絶させることで、『新しい、民主的な都市計画』と『私利』に拘泥する土地所有者たちという構図を提示する」（88頁）と指摘している。それは戦前・戦中または明治維新以前の時代を「古い」ものとして切り捨て、常に刷新され続ける現在を無条件に肯定する近代化理論の焼き直しにすぎない。

こうした焼跡のあとにあらわれたのが「復興」や「開発」の前提として「破壊」が意図

的に行われてきた歴史である。アメリカ陸軍通信隊によるプロパガンダ *The Big Picture* というドキュメンタリー番組はこの復興／開発を推進した。1951年から1964年までアメリカ軍放送 (American Forces Network、AFN) が、朝鮮半島、フィリピン、ヨーロッパなどアメリカ国外に駐留する兵士に世界情勢を伝える目的で放映されていた番組であり、そのエピソードの一つに“TV 423: Okinawa—Bastion in the Pacific” (「沖縄：太平洋の砦」) がある。同映像資料はおそらく1950年代前半か半ばに撮影・制作されたものと思われる。

映像の一端には次の様なナレーションがある。1853年のペリー来航後もほとんど変化・発展のなかった島が、第二次世界大戦末期の沖縄戦を機に変貌した。中国大陸が共産化した1949年以降は特に、朝鮮戦争の拠点として駐留米軍基地を大いに強化する必要が生じたために、米軍から大量の建築資材が持ち込まれ、雨風に耐えうる頑丈な倉庫や港湾、司令部が次々と急ピッチで建てられ、建設ブームが始まった。サボタージュすることもなくまじめに働く友好的な沖縄人労働者によって、泥んこだった道路はアスファルトで敷き詰められる。沖縄人は、米軍占領下だからこそ他では得られない近代的な技術を学ぶ。つまり米軍占領下で「近代化」の恩恵を享受する沖縄のイメージがそこには巧みに作られている。

こうしたプロパガンダ映画で喧伝される戦後沖縄の「近代化」は、占領主体である「『米軍の許す範囲』での復興」であり、いわば軍事と結び付いた経済開発による支配であったとこれまでの先行研究は指摘している (若林千代『ジープと砂塵：米軍占領下沖縄の政治社会と東アジア冷戦 1945-1950』有志舎、2015年、86-88、152-163頁など)。同時期の1949年のトルーマン大統領の年頭教書にある「われわれは一つの大膽な新計画に乗り出し、米国の科学の利点と工業の進歩とを、後進地域の改善と成長に適用するようにしなけれ

ばならない」という発言にも裏付けられているように、世界を米国が支配していく上での重要な鍵として占領地域に対する開発・復興計画があったことは明らかである (末廣昭「開発途上国の開発主義」東京大学社会科学研究所編『20世紀システム 開発主義』東京大学出版会、1998年)。つまり、復興と開発は第二次世界大戦後の米国の外交戦略の論理のもとで進められ、戦後におけるアメリカ帝国の覇権を拡張するいわば土台であった。

米軍プロパガンダ映画が沖縄の1950年代前半を近代化のはじまりの時期と位置づける一方で、1953年4月「土地収用令」後の伊江島を含む沖縄各地では、収容所からの解放後、人びとが建て直しつつあった集落の生活基盤が再び破壊されていた。伊江島では、1955年3月11日に米軍武装兵が上陸、14日に住民を立ち退き集落を破壊した。米軍はガソリンを散布して農耕地と林野を徹底して焼き払い、その後も一年おきに焼き払いを繰り返し、農民の耕作地は米軍演習場と化した (なお伊江島土地闘争については阿波根昌鴻『米軍と農民』岩波書店、1973年などが克明に記録している)。また、現在は米軍基地「キャンプ・ズケラン」となっている伊佐浜はかつて「沖縄一の美田」と言われていたが、1954年、流行性脳炎を媒介する蚊の発生の防止を表向きの理由に米国民政府によって稲の植え付けが禁止され、新規土地接收計画が上からの命令で一方向的に決定された。土地接收の中止を求める住民の要求・陳情にもかかわらず、米軍は伊江島を上陸した同日の1955年3月11日にブルドーザーで土地をならし、銃剣をもった武装米兵が座り込む住民たちを立ち退かせた。二度目の接收となる1955年7月19日、米軍武装兵が未明に伊佐浜を包囲し、住民を立ち退かせて家屋を焼き払い農地を潰して基地が作られた。近代的な都市空間が形成される一方で、暴力的な第二次土地接收と軍事基地建設が展開していたのだ。

つまり米軍プロパガンダ映画が「沖縄戦を機に変貌した島」を描いたように、〈焼跡〉を作り出すことこそが軍事基地建設を可能にし、戦後開発・復興を可能にした。さらに言えば、そうした目的のもとで焼跡は繰り返し生み出され続けてきた。ドキュメンタリー映画『誰も知らない基地のこと』*Standing Army* (Thomas Fazi, Enrico Parenti 監督、2012年)で人類学者のCatherine Lutzも述べているように、基地と戦争の関係はとても密接であり、ほとんどの基地が戦争の産物である。実際、嘉手納基地や読谷補助飛行場は第二次世界大戦末期の1943年以降、現地住民の労働力を動員した日本軍によって建設された。これらの基地は米軍上陸後は米軍によって引き継がれ、沖縄戦中は本土攻撃のために使用され、冷戦期は米国の世界的覇権の拡大・維持のために拡張された。つまり米軍上陸前に日本陸軍によってなされた全島要塞化を基礎としながら米軍は大規模な飛行場の修復と拡張工事を繰り返して基地を建設した。沖縄の戦後空間において「権力の空白」は存在せず、人びとは「あらたな権力関係に直面した」(若林『ジープと砂塵』25頁)。「焼跡」はこうした軍事権力の継続性のみならず、資本主義的都市空間の開発と帝国主義的空間である軍事基地の不可分の関係性を思考不可能で不透明なものにしてしまう。

著者が批判的に問い直しているように、「焼跡」や「グラウンド・ゼロ」という歴史の「起源」や「はじまり」を象徴する記号は、生活の営みすべてが燃やされ消し去られるということがなぜ起こったのか、何のためになされたのか、その歴史性を不問にする。9.11で崩壊したワールド・トレード・センター跡地も「テロとの戦い」の時代の幕開けを象徴する「グラウンド・ゼロ」と呼ばれているが、国際政治学者のChalmers Johnsonが*Blowback: The Costs of American Empire*で論じているように、9.11は(外交の)「ブローバック」——これはアメリカ

の中央情報局(Counter Intelligence Agency、CIA)の用語であり、外交政策が原因で自分の国に跳ね返ってくる予測できない不本意な結果を意味する——の一つであり、記号としての「グラウンド・ゼロ」は問題の根源ないしは「出発点」としての帝国主義の起源、資本主義の起源にある囲い込みを見えなくしてしまう。たとえば沖縄における基地建設は、人びとの生活空間を更地にし、焼き払うことではじめて可能となった。だがもっといえば、沖縄の軍事化は、沖縄が焦土と化した地点においてではなく第二次世界大戦末期からはじめていたものであり、戦後も軍事化のイデオロギーが継続するなかで焼跡が生み出され続けた。つまり沖縄という土地空間に戦前から作用してきた帝國的な領土拡張の野心が戦後においてどのように継続し、あるいは顕現してきたのかは焼跡の記号性を問うことによってはじめて見えてくるのである。

3. 共同性を排除し、破壊の忘却を促す消費資本主義社会の「ナショナルランドスケープ国民的地景」

しかも焼跡がつくり出されるのは一度限りではない。焼跡は永続的に生み出され続ける。本書で幾度となく使われる「ナショナルランドスケープ国民的地景」という語のlandscapeは「風景」・「景色」という名詞的意味のみでなく、landscaping「(庭園・公園などを)美化する」という動詞的意味も持つ。先住民の土地を収奪した場所に移住した白人入植者の末裔である米国のミドルクラスや富裕層が所有する不動産において人工的に作られ、膨大な量の水を消耗するマイホームの庭は階級的ステータスのシンボルになる。そうした収奪の歴史を隠蔽すると同時に階級の上昇志向の記号になった空間の手入れ作業であるlandscapingを担う肉体労働は、多くの場合、差別や排除の対象になる非白人の移民である。つまりlandscapeは特定の空間に対する積極的な改変を行う力が作用する動態で

もあると同時に、消費資本主義社会の風景を成立させ維持するための動態でもあり、そこには重層的な収奪と搾取の構造が作動している。そしてそうした風景の成立によって、空間を囲い込む過程で行使された暴力の痕跡が隠蔽または抹消され、私たちを歴史的記憶喪失へと陥らせていく。本書は私たちをそうした忘却に陥らせる力を感知し、空間に作用してきた権力とその連続性や移行を分析する視座、そうした忘却を促す力に抗う術を提起してくれる。

沖縄における軍事基地は特に沖縄島中部においては隠蔽しようもないほど大きく異様に可視化された存在である。しかし田仲康博の『風景の裂け目』（せりか書房、2011年）が指摘したように、軍事占領を維持するために整備されてきたインフラや消費文化の形成は暴力を伴う土地接収から注意をそらし、忘却させる装置としても作動してきた。1972年の施政権返還や1987年の海邦国体、2000年の沖縄サミットといった祝祭的な国家行事もまた沖縄戦の記憶を忘却させ、継続する軍事基地駐留の暴力性から目を背ける力として大きく作用してきた。

生活空間に存在する基地は「風景」に亀裂をもたらす。だがその時、沖縄を単なる「被害者」で東京を「加害者」として二項対立的に描くのは怠惰であり、そうした認識が「負担の平等配分」を求めるような思考に陥らせてしまうことについては田仲も警鐘を鳴らしているとおりである。逆井の批判的な風景論もまた、こうした単純な「^{ナショナル・ランドスケープ}国民的地景」に対峙し、風景とその言説そのものに潜んでいる複合的な権力や闘争をあらわにする。帝国主義の起源、資本主義の起源としての「^{グラウンド・ゼロ}出発点」やその変遷を緻密に分析し、日米安保・日米同盟が自然化されてしまった現代の日本の風景に楔を入れる方法を本書は示唆しているのだ。

消費資本主義社会の風景は、人びとがかろうじて生き延びることを可能にした生の空間も否定し抹消することで生み出される。第2章で

逆井は「戦後の消費者を取り巻く環境の前提をなしたと論じている」と評する原山浩介の議論（『消費者の戦後史——闇市から主婦の時代へ』日本経済評論社、2010年）および「個人商店規模による経済活動を育成したと考察する」という初田香成の議論（『都市の戦後——雑踏のなかの都市計画と建設』東京大学出版会、2011年）などの闇市をめぐる先行研究を参照し、こうした闇市での経済活動の主体が罹災者や引き揚げ者や復員兵であり、そうした共同の生の空間が引き揚げ帰還した人たちも含めた人びとの生存を支えたと理解し、それが「戦災復興計画」にのっての「障害」として規定されていく過程を明らかにしている。

戦時中の闇取り引きは軍需産業を中心にした統制経済という体制自体が生んだ副産物のようなものである。また、その経済体制のために「民」の生活が困窮し、闇取引に頼らざるを得ない状況だった。しかしながら、その生きんがための闇取り引きが「軍、官」とひとくくりにして非難され、最終的には「国民全体」の「道義のすたれ」とされることで責任の所在が曖昧にされた。ここから、闇市を国民の道義衰退として非難する新聞記事が乱発する。（120頁）

つまり闇市における「軍、官」による「闇取引」の問題は看過され、戦時中の統制経済という体制そのものの問題もうやむやにされ、闇市を「国民の道義衰退として非難する」世論が生まれた。それによって闇市という空間が否定され、人種主義的なまなざしを向けられていく過程があった。そうした眼差しは、「かつて帝国の内部に『臣民』として位置付けられていた朝鮮人と台湾人」を「闇市」の「不道徳性と外部性」の要素において捉え、「戦後日本の外部の存在へと押し出すことになった」（127頁）。そうした「闇市」の表象の変遷を経て「単

一民族」としての「戦後日本」が形成されたのだと逆井は指摘する（127頁）。

……「五族協和」や「日鮮同祖論」のような多民族性を称揚していた帝国が崩壊し、占領期を通して「単一民族」による「戦後日本」へと変身を遂げようとする、その転換点に闇市があるということだ。これまで闇市は、その庶民の経済的自立や階級移動を促進させる空間、戦後都市構造を決定づける空間として論じられていた。しかしここでは闇市を、国家を構成する人種への想像力が、多様性から単一性へと推移する際に「日本の外縁」として機能した空間として提示したい。[改段]しかし排除される側から見れば、闇市はそのような時代の流れに抗う場でもあった。（136頁）

かつての帝国の臣民、引き揚げ者たち、帰還者たちが交差する1940年代後半、人口の外部―内部を境界付ける力は増していた。本書が先行研究に対しあらたに提起したのは、国民形成や経済体制の変化があらわれる結節点を闇市という空間に見出したこと、空間をめぐる改変の力が、占領軍の戦略・政策のもとでどのように作用していったかを示したことである。こうした空間をめぐる改変の力は、「『新しい国家』から除外され、苦渋の生活を余儀なくされた民族」（153頁）といった難民化した人たちが戦後、生きのびることをかろうじて可能にしてきた空間を破壊し、それによって支えられてきた生を否定した。闇市を描くことの意味について、逆井は次のように述べている。

闇市をただの混沌の空間としてではなく人間が生きてきた場として描くことで、日本社会が忘却しようとする過去の暴力とその責任に向き合い、またその視座から「戦後日本」という歴史認識を相対化する。

（171頁）

上記の箇所を読んで思い起こされる映像の一つに深作欣二の『軍旗はためく下に』（1972年）がある。ニューギニア戦線での人肉食のトラウマに苦しむ帰還兵が、戦争体験の記憶から逃れられず、経済成長で変容する都市からは距離をおき、帰還兵自身が「朝鮮人部落」と呼ぶ、まるでゴミ捨て場かはきだめであるかのような場所で生活している。一見、その空間は、すべてを破壊し新しく創造し均質化する開発・消費空間としての「ナショナルランドスケープ国民的地景」とは対極に位置する貧困や差別が凝縮された場所である。しかし、逆井の視点はこうした戦後復興によって破壊される空間を憐憫の対象にするのでも、美化するのでもなく、そこに息づく複雑な人間の主体を慎重に取り出し、民衆が発明した生存と生活を営むその歴史性と向き合う。

評者が聞き取りを続けてきた崎原盛秀は「日本のなかのはきだめを作り出す場所としての沖縄が見えてきた。沖縄に対するヤマトが具体的に、ひとつひとつ、民衆のなかに映像みたいに映ってくるものがあった」（崎原盛秀からの聞き取り、2009年）と述べたことがある。つまり沖縄は「はきだめ」であり、逆井が記述しているような「闇市」的な空間として重ね合わせて見ることができる。沖縄は「『日本の外縁』として機能した空間」であり、同時に、そうした「時代の流れに抗う場」でもあった。1950年代前半の沖縄を描いた米軍のプロパガンダ映画が近代化の象徴としたアスファルトやコンクリートは、まさにそうした集落や農地といったものに内在する人びとの生存をかけた抵抗の歴史や記憶を忘却に追いやる象徴に他ならなかった。日本列島が近代化・コンクリート化されていく過程を石牟礼道子は「大地が窒息していった」と表現したが、そうした忘却にいたる過程を丁寧に記述することの意義を本書は喚起する。

「日本の外縁」として機能した「時代の流れに抗う場」としての〈焼跡〉や〈闇市〉をめぐって展開する交渉、抵抗、連帯の契機における主体を担ってきたのは往々にして生活の再生産労働を行う女性たちである。第9章「おかみさんたちの闘い」は、女性たちの交渉や抵抗がどのような契機において生み出されたのか、そして交渉や抵抗の主体を担ってきたのは誰かを明確に捉え、その意義も提示している。

……部落の「おかみさんたち」が運動の主体として描かれるとき、知識人男性が主導する純化した「民族」の運動と硬化した「日本」との対立構造を更新し、再びその運動を活性化させ流動させるエネルギーが生まれる。(322頁)

このような異郷のなかで無視されてしまう、生きるための訴えをどのようにして再提示するか。朝鮮人に課せられたイメージのくびきをずらすために、自らの運動の単位である「民族」の内部の差異を提示することによって、そしてその差異こそが本来の運動の源であることを示すこと。(323頁)

「おかみさんたちの闘い」が「男性たちの運動を支える受動的な母や妻ではなく、より積極的・主体的な実践をおこなう」(319頁)女性たちを捉えたように、伊佐浜土地闘争でも、「円満解決」を目論む米国民政府が村長らに妥協を求めていく風潮のなかで、女性たちが立ち上がり「金は一年、土地は万年というとおり、私達は補償なんか問題にしておりません。土地は汲んでも汲んでもつきない泉です。土地がとりあげられたらわたしたちは死ぬのです」と訴えたというエピソードがある。

交渉や抵抗の契機が生み出されてきた沖縄という戦後空間について、たとえば土井智義

は「難民」が行き交う戦後沖縄における「非琉球人」強制送還を通じた人口管理体制と排除の問題（「米国統治期「琉球列島」における「非琉球人」管理体制成立過程の研究：奄美返還直後までの「本土籍者」に対する強制送還を主軸として」（大阪大学提出博士論文、2017年3月）を指摘し、鳥山淳は米軍側の統治政策に対する「協力の論理」が「自治と復興」という政治課題として現れてきたことに着目している（『沖縄／基地社会の起源と相克—1945—1956』勁草書房、2013年）。また栗原彬も沖縄は「中央に対する辺境の位置」にあると同時に、「辺境のなかの中央という部分」も存在し、振興策や補助金を求めて積極的に基地を受け入れようとする「沖縄の欲望の部分」が「システムの中央の代行」を遂行し、殺し、支配し、抑圧する代行者になってしまうと分析している（「水俣病という思想——「存在の現れ」の政治」『立教法学』第61号、2002年3月、15-18頁）。

終章において著者は次のように述べる。

抵抗の言説を確立するためには、図らずも強者としての抑圧者の存在を求めるといふ皮肉を抱え込んでしまう。「抵抗の正義」を確保するために、立ち向かうべき絶対的で強固な権力を想定してしまうのだ。結果的に、レトリック上に中心一周縁の構図を認めてしまうことになる。こうして周縁に位置づけられた抵抗は、中心が権力体制を整えようとする動きに補完的な働きをし、その運動さえ中心の論理に取り込まれてしまう。こうして中心一周縁という二項の関係性はこの取り込みのダイナミズムも含めたうえで構図として固定化し、そのフレームが容易に国家を呼び込んでしまうのだ。

こうした「中心一周縁の構図」は、冷戦後から現在にいたる「東京／本土—沖縄」や三・

一一以降の「東京―福島」の関係にも該当する。この構図のせいで、どうせ敵わない「絶対的で強固な」米軍を支えるアメリカ帝国や原子力エネルギーを消費する資本主義の構造に対し、抵抗する側の一部は闘争を挑むどころか、それらの実態を緻密に分析さえもせず、米軍基地や原発を「周縁」から「中心」へと移動するような「犠牲の交換」をもとにした対策を提案してきた。逆井は「占領期日本を語る様々な言説から、〈焼跡〉の物語のほころびを見つけ出すこと、そしてその矛盾をさらすことである」（331頁）と述べる。それは、いまもなお強靱に機能するこうした「中心―周縁の構図」の「ほころびを見つけ出すこと、そしてその矛盾をさらすこと」をも意味する。映画や文学作品といったテクストを読み直すことを通じて、記号としての〈焼跡〉や〈闇市〉が覆い隠してきた、継続する帝國的権力による暴力と排除の時代を生きた主体を描き出し、民族の抵抗の経験の内側に分け入り、そのなかで形成される新たな主体からの声を捉え、交渉や抵抗の主体形成を見出す方法を読者に提示する本書は、わたしたちの社会における帝国と資本の矛盾をえぐり出す端緒を開いてくれるに違いない。